

# III. ガーナ現地研修の様子と受講者の学び

※ 現地研修の「研修報告書」を一部編集して掲載した。

[ 7/30 (火) ]

## ① ガーナ事務所オリエンテーション

サブサハラアフリカについての説明から始まり、ガーナについて温厚な所長さんから詳しく説明をいただいた。そんな中で聞いた教員のモラルの低さには驚いた。無断欠勤や農作業のための教員の遅刻。しかし彼らには彼らなりの事情があることも同時に知った。給料がかなり安い場合もあったり、雨が降れば水が溢れかえり移動できないということもあるようだ。これから視察する上でとても参考になる話を聞くことができた。その他安全対策について、ガーナは危険なところへ行かないこと、節度ある行動をとることが注意された。健康管理についての説明では、想像以上にマラリアへの防蚊対策の話がなされた。蚊に刺されないように24時間体制で策を練り、帰国後も1か月ほどは風邪症状に注意するように言われた。そして哺乳動物に噛まれた時は、狂犬病を危惧し病院へすぐ行くように指導がなされた。かなり警戒しながらガーナでは生活しなければならなかったと感じた。(伊藤実知子)



[ 7/30 (火) ]

## ② アクラ市内市場

アクラモールは近代的な富裕層向けの大型ショッピングモールだ。綺麗に舗装された駐車場には車がたくさん駐まっている。多数のアパレルや電化製品(日本メーカーも!)の店と、大型スーパーが二つ。日本と変わらない雰囲気一拍子抜けしてしまった。皆チョコレートを探しに行くも、先客の外国人団体が買っていったため欠品中だった。次の見学地、野口英世像に向けて時間通りに出発したはずが、大渋滞に巻き込まれてキャンセルになってしまった。ガーナは公共交通機関が発達しておらず、移動はトロトロという乗り合いバスか車がメイン。身をもって車社会の勢いを体験した。

次に、マコラマーケットという庶民の市場に向かった。カメラのレンズを向けると猛抗議されるのは、写真を売られると思うからだそうだ。また、よく「Chinese?」と聞かれた。商品は綺麗に陳列されており、器用な人が多い印象。



頑なそうなマダムも、商品を購入し始め、しばらく話したりしていると機嫌が良くなって態度がちょっと変わる。大らかな国民性を感じられて面白かった。布やシアバター、チョコレートなどの特産品を買ったが、ガーナのことを知りたいと伝えると、どの人も丁寧に様々なことを教えてくれた。現地の人との交流や、交渉による買い物はとても楽しく、もっとガーナという国を知りたくなった。(浦部紗矢)

[ 7/31 (水) ]

### ③ 青年海外協力隊 (小学校教諭) 活動 [アカチ、小学校]

青年海外協力隊の大橋みぎはさんが出迎えてくれた。教育事務所の案内、そこで働く人たちの紹介をしてくれた。その後、小学校へ移動すると、ある子どもが物運びを手伝ってくれて、うれしかった。先生方との自己紹介の後、朝会があり、私たちはリコーダーをふき、「幸せなら手をたたこう」を歌うと子どもたちものってくれた。その後、現地職員による算数の授業を参観。実物を使った買い物ロールプレイングが興味をさそう授業だった。ただし、教師が間違った答えを教えることもあった。ただ、子どもたちがノートに字を書くとき、書く手・腕をすごく曲げて書いていることには驚いた。その後、私たちが3つの教室に分かれて、考えてきた授業を行った。紙飛行機は盛り上がった。楽しい活動は日本でもガーナでも同じだと思った。私のチームは、その後相撲とサッカーを外でやった。相撲は、現地の先生の提案もあり、男女対抗でやったところ、女子が強くて大盛り上がりだった。相撲って意外に面白いんだなと感じた。(江間成昭)



[ 7/31 (水) ]

### ④ ボランティアホームステイ先ホスト宅での食事・交流

大橋みぎは青年海外協力隊のホームステイ先で、アカチで人気の「ウォッペレ with ペペ・ティラピア」をいただきました。トウモロコシの粉で作ったウォッペレとティラピアという魚をペペ (とうがらしのソース) に付けて、いただく料理です。私たちのために、辛さを控えて食べやすくしてくださっていて、とてもおいしくいただくことができました。

「ウォッペレ with ペペ・ティラピア」の食べ方だが、右手を使って食べる。まずは水の張った洗面器に右手を入れ洗い、次に液体石けんで右手をこすった後、洗面器に手を入れすすぐ。その後は右手でウォッペレやティラピアをちぎってペペにつけて食べた。ウォッペレはかなり熱くなかなかちぎれなかったが、ガーナ人の手の皮は私たちよりもずっと厚く平気だそう。ホストマザーを始めとしたホームステイ先の皆さん、大橋さん、ボランティア調整員の方たちと交流することができ、おいしい食事とともにすばらしい時間を過ごすことができました。(川口茉莉)



[ 7/31 (水) ]

## ⑤ 青年海外協力隊（保健師）活動 [アダフォア、保健室]

ガーナでできた初めてできた保健室であり、同時に地域の診療所の役割も併せ持っている。学校長が地域の保護者から少しずつお金を集めて薬を購入し運営していた。青年海外協力隊の外山さんは、日本では助産師として勤めていたが、ここでの役割は地域の保健師として活動している。

この地域はガーナ中でも最も貧しい地域の一つで、ギニア湾に面した漁村である。高潮によってこの地域は水没することも多く、漁業によるわずかな収入で生計を立てている家庭がほとんどだ。最近では農業を行う家庭も少し増えたが、基本的には漁業以外に産業はない。そのため職業は漁業に限られるので、そもそも学校で教育を受ける必要性を感じていない家庭が多い。例えば、小学1年生といっても年齢は6歳から20歳を超える若者までバラバラであり、そのうち6年生まで通えるのは3分の1程度しかいない。親の本音としては、学校に行かせるならば少しでも家業の手伝いをさせて豊かになりたいと願うのだ。こうして就学率や識字率が伸びないことが貧困の根本にあり、現状を知るとなかなか難しい課題だと感じた。(五藤 聡)



[ 8/1 (木) ]

## ⑥ 青年海外協力隊（プログラムオフィサー）活動 [NGO グローバル・ママス]

赤土の道路を行くと、そこにグローバル・ママスの工房がありました。お出迎えいただいたのは、青年海外協力隊の東郷さん。笑顔がとても素敵な女性でした。カウンターパートの女性と笑顔を交えて話しておられ、公私共に極めて良好な関係を構築されているのがよくわかりました。中に案内していただくと、何人もの女性たちがビーズ作りをしておられました。彼女たちの耳に日本人が来るという説明は当然あったでしょうが、我々「外国人の集団」の訪問



に最初は表情も硬いものでしたが会話を交わすうちに次第に雪も解け、あちらこちらで笑顔を交えて交流させていただきました。東郷さんからは様々な苦労話を聞かせていただきました。任務地での環境が必ず良いものではなく、生活に苦労されながらも、スタッフのより良い現場づくりのため、笑顔作りに勤しむ東郷さん。笑顔の裏に隠された彼女の姿と、工房の和やかな雰囲気からは、異国から来た女性がそこへ到達するまでの大きな苦労とその成果を感じることができました。(小林一憲)

[ 8/2 (金) ]

## ⑦ 天水稲作持続的開発プロジェクト

ガーナではジョロフやフライドライスなど、米を利用する料理が多い。しかし、国内で出回っている米の70%ほどが輸入米だという。この天水稲作持続的開発プロジェクトは、アシャンティー州及び

ノーザン州の低湿地 14 ヶ所で農業支援を行っている。JICA の支援は少ない経費で誰にでもできる稲作技術の伝達だ。また、2015 年までには国の人口が 2700 万人になる見込みで、急激な人口増加による米の消費拡大に生産が追いついていない。そのため、収量の増加を第一に目指して取り組む。次は、米の品質向上のため、ジャスミン米などの研究も行っている。



今回案内していただいた JICA 専門家の任期は来年の 7 月までということで残り一年をきった。そこで、何ができるのかガーナ人と協力して日々奮闘している姿が印象的だった。また、農家の方が「このプロジェクトのおかげで収入が 3~4 倍になり、子どもを学校に行かせられるようになった」と話してみえた。女性も社会の中での役割が位置づけられ、自信をもってみえる姿が見られた。このプロジェクトが終わっても、稲作が発展し続けていくガーナが見えたような気がした。(佐古亜希子)

[ 8/2 (金) ]

## ⑧ シニア海外ボランティア (電子工学)、 青年海外協力隊 (自動車整備) 活動 [クマシ技術短期大学]

JICA のシニア海外ボランティアとして活動する円子さんの活動の様子を見せて頂いた。円子さんは、電子工学の専門性を活かし様々なユーモア溢れる発明品を作っており、「Fufu Mama」はその代表的なもの。ガーナ人の日常食である「フーフー」というヤマイモとプランテンをこねたお餅のような食べ物を、自動にこねてくれるものだ。円子さんの発想力の豊かさに研修参加者は驚くばかりだった。また、他にも自動車整備の技術を伝えている青年海外協力隊の林さんの活動を見せて頂いた。学生たちに整備技術を教えるための部品すら揃わない状況の中でご尽力されている姿が印象的でした。(鈴木吾宙)

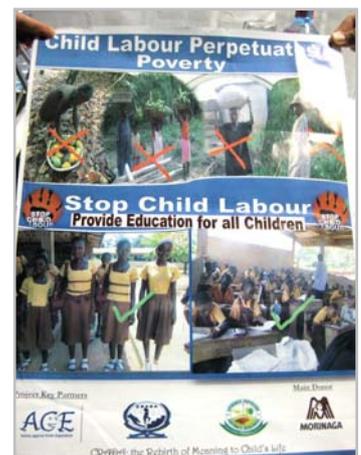


[ 8/2 (金) ]

## ⑨ ACE の児童労働対策活動についての講義 [CRADA]

児童労働の撤廃と児童労働を予防するための仕組み作りに取り組んでいる日本の特定非営利活動法人 ACE のガーナでのパートナー NGO である CRADA の方の講演をホテルの会議室で聴いた。子どもたちが、貧困により働かざるを得ない状況にあると学校に行けないという問題につながる。そこで、ACE では子どもの就学の徹底と学校環境改善、農家の収入向上に取り組んでいる。

ガーナの児童約 636 万人のうち、約 127 万人 (20%) が商業的農業を含む最悪の形態の児童労働に従事するとされている。そのうち



39%は14歳以下の子どもである。ガーナの小学校、中学校は義務教育で無償と言われるが制服代、テストのための紙代（卒業するにはテストを受けなければならず、紙代が払えず卒業できない生徒もいる）、文房具代などが年間約500セディ必要であり、貧しい家庭は子どもを学校に行かせたくても行かせられない。そして家庭を助けるために働いてもらいたい。また子どもたち自身も貧しい親を支えるために自分たちがはたらかなければならないと考えているようだ。この結果、負の連鎖が起こる。

ACEとCRADAが特に力を入れているのが「スマイル・ガーナプロジェクト」。カカオ生産地での危険な児童労働から子どもを保護し、就学を徹底することを目的としたプロジェクトだ。子どもがしっかりと学校に通うようになることで児童労働を予防し、カカオ農家が継続して子どもの教育に投資ができるよう、カカオ農園の経営を改善し、農家の収入や生活向上に貢献している。（川口茉莉）

[ 8/2(金) ]

## ⑩ クマシ周辺の JICA ボランティア、JICA 専門家との懇談会

JICA 専門家、青年海外協力隊、シニア海外ボランティア、企業の方など、クマシで活躍する日本人の方々と中華料理店にて懇親会が行われた。昼間にもインタビューをしたり、説明を聞いたりしたが、こうしたリラックスした席ではさらに話が深まり、充実した時間を送ることができた。どの方も、苦労や悩みは抱えてはいるものの、ガーナの人と共に夢を実現させていこうとする熱い語りは、私の人生を振り返るきっかけとなった。はじめに国際協力ありきではなく、どの人も自分の好きなこと・得意なことを極めていくうちに、ガーナに至りついたことがわかった。誰にでも好きなことや得意なことはある。自分の良さを伸ばしていくことが国際貢献にもつながっていく。帰国してから生徒にそんな話をしたいと強く思った。



中華料理はとてもおいしく、久しぶりにお腹を満たした。またこの国に旅行しても中華料理店がある中国人のパワーはすごいなと感じた。（割石裕美子）

[ 8/3(土) ]

## ⑪ 国道 8 号線改修計画プロジェクト

何も無い道ばたにぼつりと立つ日本とガーナの国旗が描かれたプロジェクト看板。その横で待っていてくださったのがコンサルタントの廣瀬さんだ。この日は滅多にない3連休の1日だったそうだが、休日返上で私たちに対応してくださった。国道8号線はほぼ完成していること、休日だったこともあり工事現場を視察することはできなかった。しかし、この場所は工事終了地点であるため、日本が改修した国道8号線とガーナ施工の簡易舗装との違いが、線を引いたようにくっきり分かれた場所でもあった。それまで走ってきた道は、バスが古いため乗り心地



が悪いと思っていたが、改修後の道は快適に走行することができた。日本の技術の素晴らしさを体感することができた。最盛期には1日400人（内日本人15名）を動員しての工事が行われたそうだ。徳倉建設キャンプヤードでは、採石資材が山積みになり、現地での資材調達の様子がうかがえた。遠く離れたガーナの地で地元名古屋の建設会社が活躍していることが妙に嬉しかった。

その後アシン・フォソのホテルに行く途中、広瀬さんのドライバー交渉によりパーム油精製所の見学をすることができた。真っ黒になった精製所はまるで石炭工場のように、沢山の女性や子どもたちが作業をしていた。

ホテルでのランチは広瀬さん予想の1時間を大きく上回る2時間待ちで食事が出てきた。さすがガーナ！さすが教師陣！この時間を利用して現地の人々にたくさんインタビューをする人、屋台を見学する人など、それぞれが有意義に時間を過ごした。（伊藤実知子）

[ 8/4(日) ]

## ⑫ カクムナショナルパーク

ガーナ南部は豊かな森林が多く、熱帯雨林もある。このカクム国立公園には、大きな木同士を吊り橋でつなぎ、地上40メートルから景観を楽しむことができる。気温はさほど高くないものの外部より湿気があり、すぐに汗が噴き出す。大きくうねった根が地上に出た木、蟻の大群の行列などといった日本では見られないものに出会えた上、ココナッツジュースを発酵させたパームワインやカカオの実の果肉などを購入して味わうことができた。カカオの実は爽やかな甘い味でとても美味しかった。



ここではドイツ人のボランティアグループにも遭遇。理科教育の任期を終えて翌日帰国するとのこと。世界がガーナに協力していることを実感する、感慨深い出会いだった。

高所恐怖症の私は上からの景色を満喫できなかったのが残念だったが、一面の緑の中にガーナの自然の豊かさを感じることはできた。事前に読んだ本に、ガーナ人が「自然を壊すような観光業よりも、自然保護を第一に考えていきたい」と言ったエピソードがあった。環境破壊はグローバル 이슈の一つで、日本でも関心の高い問題だ。自然と共存できる仕組みを、全世界を挙げて作り上げていかなければならない。（浦部紗矢）

[ 8/4(日) ]

## ⑬ ケープコースト城

とてもきれいな海沿いにある城なんだとはじめは思った。城から見る海の眺めもきれいだった。でも、城の中の地下は、薄暗くて、息苦しくて、何だか辛かった。奴隷貿易っていう負の遺産があって、その周りにはきれいな海で、その海では今はサッカーしたり散歩したりする人々の幸せな姿があって、複雑な気持ちになった。こんな美しい海から、奴隷を出して



いたことに、違和感を覚えた。その後、この負の歴史をガーナ人があまり知らない、教えないってことを知った。その理由は、①ヨーロッパ人との関係を良くしていくよう、マイナスイメージをつけないため、②ガーナ人も奴隷に関わっており、自尊心を傷つけないため、ということらしい。負の歴史は教えるべきか、教えないべきか、考えた。やはり、事実は教えないといけなかなと思った。同じ過ちをおかさないように、過ちから学ぶように。ただ、人間性は人種で決まるのではなく、個人によるところがあるので、簡単な二項対立（白人とガーナ人）で善悪を伝えるのはよくないと思った。（江間成昭）

[ 8/5 (月) ]

## ⑭ 青年海外協力隊（青少年活動）活動 [メアリー・スター・オブ・ザ・シー国際学校]

今回訪問させていただいたのは、メアリー・スター・オブ・ザ・シー国際学校という私立の中学校だ。この学校の中学1年生と別の小学校に通う5、6年生との交流の機会を持った。メアリー・スター・オブ・ザ・シー国際学校には幼稚園から中学校までが同じ敷地内にある。中学校に関してはガーナ内でもとても上位の学校で、全員が優秀な高校に進学するそうだ。また、ガーナで3校しかない日本語を授業で教えている学校の1つだ。



私たちが学校に到着すると、まずは生徒たちのビーズ作品を見せていただいた。売り物にもなっていて、中学生が作ったとは思えないくらい良くできたものもあった。その後、ウェルカムセレモニーではガーナの伝統的なダンスを披露してもらった。初めてガーナのダンスを見ることができとても感動した。その後、辰川はる奈青年海外協力隊が行う日本語の授業を見学させていただいた。大きな声で日本語の練習をしたり、かるたを楽しむ生徒の姿がとても印象的だった。昼食の時間も生徒たちが日本語の歌や劇を披露してくれとても楽しい時間を過ごした。その後は、私たちが日本の文化を伝える授業を行った。日本に興味がある生徒が多く、楽しんでもらえて良かった。

最後に、ガーナ人教師たちと意見交換をした。どの先生も、授業時間外に教材研究を熱心にやっていたらして、生徒の成績を上げることでたくさんの生徒を集めたいという気持ちを持っていらした。1学期につき、授業料が200~300セディ必要と家庭の負担はとても大きいですが、生徒たちは公立学校よりもずっと恵まれた環境で勉強ができています。（川口茉莉）

[ 8/5 (月) ]

## ⑮ テテクワシ・ココ農園

授業や受験指導で何度と教えてきたカカオ生産の現場。夢にまで見たカカオ農園。ガーナに来た楽しみの一つがカカオ農園であり、きっとその辺の道端にカカオ畑がごろごろと展開しているはずだとバスの中から探したが、結局、研修も終盤となるこの日まで、カカオ農園を見つけられなかった。それもそのはず。カカオは直射日光に弱く、守り木と呼ばれる木々やバナナやイモなどの農作物とあわせて栽培されていて、薄暗い森林に覆われて生産されていたからである（本場ガーナでは、カカオはココアとかココと呼ばれている）。

農園ではカカオの木の栽培条件やカカオ豆の発酵と乾燥等について教わった。ラグビーボールのような大きな実(カカオポッド)は、幹や枝のいたるところにぶら下がっていて、その始まりは1センチほどのうすいピンクの一輪の花である。初めて対面した時の感動は、長年待ち焦がれたアイドルに出会った時のようだった。実の中には40~60粒ほどの白い種があり、そのまま食べるとライチのような甘酸っぱさ。外皮はウシなど家畜の飼料としても利用される。種をバナナの葉にくるんで1週間発酵させ、天日干しして乾燥させると茶色く変わっていく。



これまで高校地理で一般的に行われてきたアフリカの単一耕作の説明は「植民地時代からの外国企業による大規模なプランテーション経営で、現地人の過酷な重労働による商品作物の生産・輸出がアフリカのモノカルチャー経済を支える」といったものであった。しかし、少なくとも私が見たガーナには当てはまらない。これからは「ガーナの多くのカカオ農家は、バナナやイモなど自給的農業と併せた小規模で複合的な経営によって伝統的な暮らしを守っている。カカオはガーナ人が誇りにする主要産業として大切にされ、農業省の中でも特定の主要輸出品として重視され発展している。」などと説明を改めたい。(五藤 聡)

[ 8/6 (火) ]

## ⑩ ガーナ由来薬用植物による抗ウイルス及び抗寄生虫活性候補物質の研究プロジェクト

アフリカでは、感染症対策は喫緊の課題として扱われています。野口英世博士自身が黄熱病で亡くなったこともあり、我々がガーナへ来るために黄熱の予防接種が必須なものも顔けます。さらにハマダラ蚊が媒介するマラリアやツェツェ蠅が媒介する眠り病、またアフリカ全土はもちろん世界でも深刻化している HIV など、感染症が依然多くの人々の今日の生活を蝕んでいます。ご夫妻共々ガーナで研究をなさっている鈴木先生。ご夫君先生の説明によると、ハマダラ蚊がマラリアを媒介できないように遺伝子操作を行う研究をなさっているとのことですが、そもそも倫理的に課題が残る方法だともおっしゃって見えました。そうすると、ハマダラ蚊自体の根絶も選択肢の一つでありましょうが、そのためだけに絶滅させられてはハマダラ蚊もたまったものではありません。そこで、ガーナで採取される植物を用いたマラリアの特効薬に関する研究が行われています。蚊も人間も、それぞれが良い形で共存できる方法がいつの日か発見されることを願ってやみません。(小林一憲)



[ 8/6 (火) ]

## ⑪ 太陽光パネルプロジェクト

ガーナ国では、経済成長による国内電力需要の増加からエネルギー源の多様化、再生可能エネルギーの導入促進が課題となっている。そこで、総発電量の10%を再生可能エネルギーで賄う計画を立て

ている。私たちが見学させていただいた太陽光パネルは、ガーナ大学付属野口記念医学研究所の電力系統に連携する太陽光発電システムの整備を支援している。今は研究所の半分の電力を賄っているが、第二期の太陽光パネルが完成すれば、研究所すべての電力が補える。



JICA ガーナ事務所の所員の方が、「ODA の取り組みでは日本の製品を使うことになるのでお金はかかる。しかし、20年後30年後のことを考えると日本の製品は品質が良く優れている」と言ってみえた。機械の設置は40℃近くの場所で作業を行うことになる。また、修理の仕方などもガーナ人に4日間ほどで指導するという。取り付けるだけでなく、その後のケアなども指導していく技術者の方の取り組みは日本を代表する素晴らしい活動だと思った。(佐古亜希子)

[ 8/6 (火) ]

## ⑱ 伊藤忠商事株式会社（アクラ事務所長）による貿易に関する講義

この講義では、貿易でのガーナと日本のつながり、カカオ輸出の話聞いた。ガーナはもともとカカオ豆の生産量が世界第一位であったが、現在はコートジボアールが一位となっている。小規模農家で行うガーナに対して、コートジボアールではプランテーションで栽培するのがその要因となっている。カカオ農園における児童労働問題について話を聞くことができた。ガーナではだいぶ減ってきているが、ゼロではないという話だった。コートジボアールでは、プランテーションという形態を多くとっているために、周辺諸国からの子どもの人身売買も問題になっているそう。カカオの国際価格が、ニューヨークやロンドンの先物市場で決められることで、カカオ生産者の暮らしは厳しいものになることが多いという話も。フェアトレードの重要性を感じた。



児童労働問題については、実際に自分たちの目で見たわけでもないこの研修で実態がつかめたかという分からない。人によっては、カカオ農園において児童労働問題は存在しないのではという意見もあった。真相が分からないまま終わったのだが、ここまでが教師海外研修の限界だろうと思う。機会があればまたガーナ含め西アフリカに個人で訪れてみたい。(鈴木吾宙)

[ 8/6 (火) ]

## ⑲ JICA ガーナ事務所関係者との夕食会

JICA の事務所長さんのお宅で、所長さんをはじめ、お世話になったガーナ事務所の所員の方、青年海外協力隊の方と夕食を共にしながら歓談させていただいた。初めてお会いする方もあったが、国際協力に思いをはせる仲間同士という感じですぐに打ち解け、いろいろなお話を伺うことができた。特に、どうしてJICAに入ったのかといういきさつや、自分の経



験や知識を生かし自分のスタイルで国際支援をやり遂げたいという熱意に感動した。また、今回視察できなかったガーナの北部は、乾燥し植物も育ちにくいいため貧しく、北部から南部に出稼ぎに来る児童も多いというお話から、ガーナの中にもまた格差があることを知った。(服部郁子)

[ 8/7 (水) ]

## ⑳ JICA 事務所報告会

JICA 事務所報告会では、5分程度で一人ずつ今回の研修で学んだことを発表した。多くの方がガーナで働く日本人から国際協力の在り方や自分自身の生き方やこれからの教育の指針を学んだということを発表していた。最後に、JICAの職員の方から、先を見越して考えることや、人の心を考えて行動するように教える日本の教育は素晴らしいので是非とも日本の教育に誇りをもって取り組んでほしいと励ましていただいた。日本のよさを土台にして、さらに、大きな世界に目を向けていけるような子どもたちを育てていきたいという思いを新たにされた。(服部郁子)



[ 8/7 (水) ]

## ㉑ アクラ市内市場

最終日はおみやげや教材の買い足しに奔走した。初日も訪れたアクラモールは、10日間ガーナを訪問した後では、また違った目で見ることができた。1年に14セディ(700円)が払えず医療さえ受けることができない人々がいるのに対し、マコラマーケットでは500セディ(25,000円)の服が売られ、それを購入していく人々の姿に、世の中の不平等さを感じた。

日本人経営の「おはようマーケット」、外国の人をターゲットにしたグローバル・ママスなどの商品はどれもかわいく、少々値は張ったが自慢できるお土産を得ることができた。ただ、どの店に行ってもレジの進みが遅く、10人の買い物を済ますのにとっても時間がかかった。1つ1つの商品の値段を確認し、ノートに記入し、丁寧に計算する姿に、ここはやっぱりガーナだなと感じた。

ガーナチョコレート、流行の乾燥麺、アフリカンなアクセサリー・・・すべて輝いて見えるお土産が、はたして日本に帰ってから見ると、どんなふうに見えるのだろうか・・・と思いつつ楽しい時間を過ごした。(割石裕美子)

